

設立 平成24年 5月15日  
開塾 平成24年 9月 8日  
発行 令和7年 1月11日  
(140号)

# 中之島二ユース

[事務局] 〒567-0861  
茨木市東奈良2-7-10  
人間学塾・中之島  
事務局 古田修平  
編集長 西村俊幸



「我が人生の転機」  
上甲晃先生  
(十二月度特別講義 より)

■「この世に不可能はない

私は松下幸之助の晩年十一年間に仕えることができました。四十歳までは電子レンジの販売課長をしており、売り上げも順調に伸びていましたある日、上司に呼び出されます。それは松下政経塾への転勤命令でした。松下政経塾は、日本を良くするための政治家を育てる目的で創立されました。幸之助が八四歳のときです。会社の命とはいえ、政治に興味も関心も経験もない自分に、政治家を育てるなどできるはずがない。勇気を振り絞って松下幸之助に直接断りにいくことにしました。当時社員は十万人、直接会えるなど滅多ないことです。茅ヶ崎の松下政経塾にて、自分は政治には全く素人でその器ではない、とはつきりお伝えしました。それでもうまく断るつもりが、幸之助の答えは全く違つた。「君、素人か。そらええなあ」。唖然とする私に幸之助は「僕も素人や。素人と言えども今の政治はほつとけん。僕は新しい政治家を育てたいんや。本当に新しいことをやろうと思つたら、何も知らん方がやりやすいんやで」。幸之助の言葉に思わず「がんばります!」と引き受けたのでした。私が幸之助から学んだものは「この世に不可能はない」。あらゆるハンディキャップは見方を変えればチャンスとなる。幸之助は全てがうまくいくようになつていて、と言つていきました。宇宙根源の力は万物生成発展の法則で働いている。大宇宙の見えない力は、全てを活かそうと働いている。だからその力に素直に従えればうまくいく、というのは絶対確信なのです。この時の体験が私の第一の転機でした。

目に見えない力を信じる力が大切なのです。どんな逆境も味方を変えればチャンス。幸之助は色紙に「素直」と書いていましたが、素直とは人に従うことではない、天地理法に素直であれ。そうすればみなうまくいく。うまくいかないのは、自分に捉われるからや。今こそその幸之助の言葉が理解できます。

幸之助からは、知識や経験はなくともよいが、この一点だけは持て、と言われたこと、それは熱心さです。熱心さにおいて、誰にも負けない真剣さを持つておれば、必ず道は拓ける。

そうして松下政経塾での十四年間、うち十年間は住み込みで塾生らと寝食を共にして熱心に取り組んできました。第二の転機は平成七年八月に訪れます。東京本社に呼び出された私は本社に戻るよう命が下つたのです。しかし真剣になって取り組んでいた仕事から離され、またサラリーマンに戻れそうな気はしなかつた。そのとき五四歳六か月、パナソニックでは五五歳まで務めると六〇歳定年と同じ待遇になることなど考えると、気持ちに迷いが出来ました。ある人に「目先の損得を考えると大きな決心が鈍る」と言われました。社命に従わざ使命に従う、の思いで会社を辞めました。

これが第二の転機です。大企業を離れ、私と妻の社員二人の零細企業での船出です。政経塾時代、伝記作家の小島直記先生から志の三つの条件を教わりました。①人生のテーマを持って。②生きる原理原則を持て。③言行一致。一生涯追い求めるテーマとはなにか。これがないと日常生活に流されてしまします。政経塾では政治家を作ることをしてきましたが、これからは意識の高い国民を作ることを人生のテーマと定めました。志ある誇り高い有権者が必要との思いで、志ネットワークを立ち上げました。

振り返れば、四十年間教育の世界に携わつてきました。次の時代の若い人を育てる仕事を育力だと思っています。そして、人に求められる限りは自らがやる。あの人を見ていたら見習わなければ、と思えることこそが最大の教育力であり、これが感化力です。自らの生き様をもつて範を示すことが無言の教育力です。子供たちにこうあってほしいと思うなら親が範を示すことで、初めて親の言葉に説得力が出てきます。例えば食事の時の作法一つにしても、口うるさく言わずとも親ができるおれば無言の教育となるものです。社長が社員に偉そうに言つたところで、本人ができるおらねば誰も見習うはずもないでしよう。

人生は一つを変えれば全てが変わる。あれもこれも変えようとするとどれも中途半端になる。知つているだけではだめ、勉強のための勉強にすぎない。知つていることとでけることは別のものです。解ったのならただちに実践すること。学びはすぐに忘れるが、その時から始めようと実践したことは積み重なつてゆく。良い話を聴き学んで、頭が変わつても人生は変わらないが、心が変われば人生は変わります。一つを変える努力をしたなら人生は必ず変わるのです。日常生活のなかで、何か一つ人のためにできることを実践されることをお勧めしたい。私のやつているディリーメッセージは毎日欠かさず続けて、一万二千回となりました。書き始めたきっかけは松下幸之助に叱られたことです。近況を尋ねられ「変わりない」と答えてしまい、「万物は変化してゐるや、昨日と今日も違う」と。そこで奮起し「日々新た」と毎日千四百字を書き始め、今日に至ります。継続は体質を作つてゆくのです。

## 『グループ討議』 上甲 晃 先生

◆ A グループ

- ・嵐に耐えられる人は嵐の中でしか育てられない

・熱心さが大切

- ・人生のテーマを持つ

◆ B グループ

- ・心が変われば人生が変わる
- ・熱心さが大切
- ・すぐに実践すること

◆ C グループ

- ・人生は一つを変えればすべてが変わる

◆ D グループ

- ・志が本当かどうか一番受け入れがたい形で現れる

◆ E グループ

- ・己の損得を超える

◆ F グループ

- ・感化力
- ・人生は一つを変えればすべてが変わる
- ・宇宙根源の力がすべてを良くする
- ・心が変われば人生が変わる
- ・実践できる人になる
- ・人生のテーマを持つ

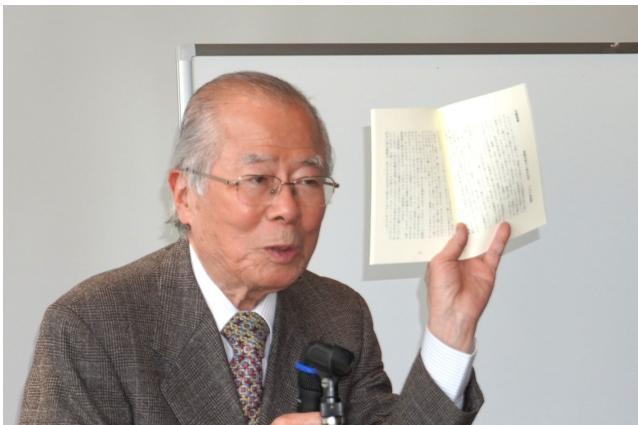
◎ 熱心さ・感化力 という感想が多かったです。



総合司会 岡本ユウコ塾生



講師紹介 伊藤秀光塾生



## 塾生からも学ぼう 塾生講話



藤井 優和 塾生

「私」として生きるということ

今年で23歳になるが、今まで多くのご縁に恵まれてきた。人に恵まれてきたといってよい。

小学生時代はまわりに合わしていたが、4年生の担任の先生は一人の大人として叱ってくれた師との出会いである。

中高一貫校へ進学。予備校で、憧れの先輩がいた。勉強の面白さを教えてくれた師との出会いである。高校になり京都大学をめざすことにした。箱根の勉強合宿での仲間との出会いは、だれかのために頑張ろうとなつた師との出会いである。

大学はコロナ禍での入学となった。京都での一人暮らし。しんどかった。しかし、ガイドサークルやNPOでの活動、エジプトへの旅行など様々な価値観との出会いにより、自分軸が確立されたと思う。

そして、「思いやりですべてをうまくいく社会を実現する」という理念に感銘し、「夢ふおと」に就職し、社会人として歩み始めている。

父親からの「我慢我慢」

母親からの「柳のように生きなさい」の教訓を胸に、名前のこどく「優しく和を大切に」いつも笑顔で生きていきたい。



磯部 泰司 塾生

人間学塾・中之島に入塾して

自己紹介から。

木村拓哉と同級生。というか同じ年齢である。現在は、両国に住んでいる。学ぶことが好きで、原周作さんの紹介で入塾した。

父親が喜多方出身である。修養団を設立した蓮沼門三先生の出身地である。

父親が設立した会社を継いでいる。

いろいろ学ぶうちに、挨拶を先にすること、ハイという返事、ゴミを拾うなどの実践が大切だと思うようになった。先程の上甲先生のお話ではないが、心が変れば人生が変わると実感している。

スーパーニチイ（現イオン）の創業者の妻、西端春枝さんの存在を塾で知り著書を読み、商道を学んだ。

心を学ぶことが大切

「心が変われば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる 人格が変われば運命が変わる」と思う。

いいひとに出逢うことを心掛けていれば、道は開けていくと思う。

安岡正篤先生の「縁尋機妙 多逢聖因（えんじんきみよう たほうしょういん）」好きな言葉である。

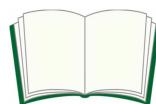
中之島ニュース紙面では皆様  
からの原稿を募集しています  
テーマは自由  
・活動報告  
・イベントの広報  
・写真やイラスト  
・日常の雑感や気づき  
ぜひあなたのお声をお寄せください。

[2012nakanoshima@gmail.com](mailto:2012nakanoshima@gmail.com)

読書感想文について  
締め切り 2025年1月31日(金)  
字数 800字以内  
書物の内容 問いません  
字数は厳守を!  
いたします。

お名前とタイトルをご記入  
ください。

読書感想文の寄稿のお願い





## 一眼は遠く歴史の彼方を、そして一眼は脚下の実践へ 人間学塾・中之島

**寺田一清先生に導かれて㉔近藤宏枝**  
**「美と静観・森信三先生の教え」**

寺田一清先生は、森信三先生の語録を『不尽叢書』(全五冊)という形式で編輯しあとがきに森先生の言葉を「真言慈語」と表現され、更には森先生が「美」の巡礼に参する方でもあって、美的鑑賞の面においても独自の冴えた「眼」をお持ちであると記されているのです。私は以前から森先生の教えに心魅かれる理由の一つとして、美しい言葉の表現の数々に出合えることだと考えていました。

ここで『叢書』の中の一冊『一日一語』から、最近再読した「仏・魔の間(かん)、真にこれ紙一重のみ。」を学びたいと思います。

「仏魔」とは「自分が仏であると気付かず、自己の外に仏を求めるこことによつて生じる執着心」と説かれています。つまり堕落させるのも生きかすのも間にあり、間とは魔でもあり、その間には美が秘んでいて、心の奥深くまで染み入るものなのだと理解します。更に「間」についてその語源はと調べてみると、門と月から見えて、夜に門の隙間から見える月とあり、その情景を思い浮かべてみるだけで、すでにその美しさに心が掴まれてしまいます。

そして日本人とは、現実に有るものからだけでなく、むしろ無いものから美しさを感じ取る民族なのだと思います。それはやはり日本は、春夏秋冬が順序だつて巡つてくることにも関係していると考えます。これは生命の息吹が吹き込まれ、感謝の念しか浮かんでこない究極の「不易」と言えるのではないでしょうか。その當みの中での「流行」に、どれだけ出合うことが出来るのかそれを見落とさなければ、大自然が私達に与えてくれた「美」に畏敬の念を持つてきたと気付くことが出来るのだと思います。森先生の教えは「日本の語録」であるからこそ「美」を感じざるを得ないのです。

『人間学塾・中之島』次月案内

【2月日程】

◆日時 令和7年2月8日(土)午後1時

◆会場 大阪大学中之島センター

◆講師 横田南嶺 管長

◆テーマ 「禅の教えに学ぶ」



常任講師の横田南嶺先生。

円覚寺管長と花園大学の総長などお忙しい中、本年もお越しいただけます。今年はどのようなお話をいたたせれるのか。今から楽しみです。

### 編集後記

新年あけましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願ひいたします。

さて、十二月は上甲斐先生。年齢を感じさせない氣迫。まさしく熱心さを身をもつて表現されるお話でした。感化力。周りに影響を与えて続けられる人になりたいと実感しました。そして、人生のテーマを持つこと。生きる原理原則、言行一致。即、見習わないと…

今年は木南一志先生です。鍵山秀三郎先生の後継者であり、常任講師として、ご出講いただいています。

今年一年皆様と共に学んでそして実践していくましよう。「ひとつでいい」小さなひとつをやり続けましょう!

編集長

西村俊幸